

明石小学校は、壊さずに保存再生するべきであった

2010年10月29日

日色真帆 多羅尾直子

中央区立明石小学校の保存を望む会

<http://www.justmystage.com/home/akashihozon/>

<経緯>

東京の中央区立明石小学校は、関東大震災の復興小学校として1926年（大正15）年に建てられ、2010年8月で築84年になっていた。明治期には外国人居留地であった明石町にあり、歴史を伝える貴重な都市景観を形成していた。

その明石小学校について、中央区による建て替え計画が明らかになって以降、計画見直しを求める動きがひろがった。特に2009年末から、卒業生や地域の建築家らが組織した「保存を望む会」が、校舎の保存とリノベーションを要望して署名活動を展開して、要望書を中央区に提出し、地域に呼びかける写真展やトークイベントを行った。2010年3月末には明石小建て替え計画を含む予算が中央区議会を通過し、建て替えのための仮設校舎の建設が始まった。しかし、その後も「保存を望む会」は繰り返し要望書を提出し、代案となるリノベーション案を作成し提案してきた。2010年8月には明石小学校の正面玄関前での抗議活動を行い、建築の価値を知った近隣住民も活動に加わっている。

専門家からも、さまざまな動きがあった。2010年2月には、日本建築学会関東支部から中央区にある7つの復興小学校校舎の保存要望、4月には日本建築家協会からの保存要望、7月には日本建築学会から再び保存要望が出され、あわせて明石小学校について重要文化財相当との指摘がなされた。8月には、建築や教育など多くの分野の有識者から明石小学校を重要文化財にする緊急要望がなされ、建築学会、建築家協会、東京建築士会の3会による解体中止を求める緊急会見もされた。

メディアによる報道も繰り返された。新聞各紙やNHKニュースで何度も報道されTBSやテレビ朝日も取り上げている。

多くの指摘、要望、批判がされたにもかかわらず、中央区は計画を見直さなかった。当初の予定通り2010年8月末から解体が始まり、建て替え計画が進んでいる。

●重要文化財に関して

Q1 重要文化財指定には時間がかかりすぎるのか？「明治生命館の重文指定は7年もかかった。そんなに長く子どもたちを仮校舎に通わせられない。子どもたちの幸せのために改築を進める。」という区長の発言について

A 所有者である中央区が文化庁に打診すれば、調査があり、審議を経て指定される。建築学会の「重要文化財相当」の見解があるので、スムーズに指定されたはずである。

明治生命館では所有者と文化庁の協議が始まってから、実際には約1年で重要文化財となっている。明石小の場合も指定に何年も要するとは考えられない。区の指定文化財として即座に指定し、建築審査会の同意を得た後、建築基準法3条の適用除外を使い、再生工事に着手することもできた。区の指定文化財から、将来、重要文化財に格上げすることも可能である。

Q2 重要文化財になったら学校として使えないのでは？

A 現役の学校として使いながら、重要文化財にすることは可能である。日本橋高島屋はデパートとして使いながら重要文化財になっている。明石小を、現役小学校として日本初の重要文化財にすることが可能であった。生徒は本物の歴史ある校舎で学ぶことができ、学校は豊かな人格形成の場となっただろう。地域住民にとって、どんなに誇らしいことであっただろうか。

Q3 建築学会の指摘は遅すぎるのか？

A 学会を非難するのは筋違いである。地元の自治体や住民が価値を認識し、早い段階で学会などに調査を依頼していれば事態は変わっていただろう。区は、解体直前の段階で出された指摘であっても、文化財保護審議会など専門家

を含めた検討をし、PTAや地元への説明をするべきであった。学会から議会や地元の説明してもらったこともできた。

●行政の手続きに関して

Q4 すでに議会で決まったことは、見直せないのか？

A 区長の判断次第で見直すことも可能であった。明石小隣の二中を福祉施設・UR住宅に建替えた時は、予算が通った後に計画を変更している。

Q5 20年前の請願は壊す理由になるか？

A 20年前の請願は統廃合反対が趣旨であった。20年がたち、新しい住民が3分の1以上になっているが、建て替えの経緯について説明はなかった。多くの住民は、建て替えの計画自体を知らずにいた。開かれた議論をしないと合意は得られない。

Q6 なぜ、集中的な報道がされたのに、見直さないのか？

A 批判されて当然な点があったからこそ報道されたのだろう。中央区の対応は、まちの評判を落とすことになった。

Q7 建て替えに補助金がでるのか？

A 文科省のRC造建物耐力度調査票では、築年数が47年以上あると、構造耐力があっても点が低くなる。点が低いと建て替えに補助金が出るシステムで、文化財的価値の有無にかかわらず文科省から補助金が出るという問題がある。

Q8 建築の専門家はどこにいるのか？

A 区の内部には文化財保護審議会がある。区に関係のある建築の専門家も多いはずである。早い段階から多様な専門家の意見を聞き、まちづくりに活かすべきである。

●技術的な側面

Q9 明石小の校舎は耐震性に欠けていたのか？

A 耐震性に問題はない。中央区のホームページにも掲載されていた。復興小学校は、関東大震災を教訓にしてつくられた耐震性と耐火性に優れた頑丈な校舎であった。

校舎の耐震診断によるとIs値0.6であった。普通の建物の耐震改修ではIs値0.6にすることが目標になるので、明石小校舎は、基本的な耐震性を有していた。教育施設の耐震性の目標値はさらに高く設定され、Is値0.7程度にすることが多いので、明石小を改修する場合には耐震補強することが望ましかった。その方法はいろいろあり、コストも考えて妥当な方法を検討すべきで、コストのかかる全面的な免震構造以外の補強は可能であった。

Q10 鉄筋コンクリートの耐久性は十分にあったのか？

A コンクリートの中酸化がある程度進んで鉄筋が部分的に錆びていたとしても、コンクリートや鉄筋を補修し、中酸化の進行を防ぐ方法があり、実施事例も多くなっている。建物を長持ちさせる方法を検討すべきであった。

明石小のコンクリートは、外部はモルタル、内部はしっくい仕上げで保護されていた。また、この時代のコンクリートは良質であると言われている。目視ではひび割れもさほど見られなかった。補修することは十分に可能であった。

●リノベーション（保存再生）に関して

Q11 リノベーションとは何なのか？

A 今までの校舎を活かして保存再生することである。抜本的な改修をして保存再生すれば、新築同様になる。維持管理すれば、さらに100年以上使い続けられる。

今までの校舎をそのまま残すのではなく、校舎がもつ質の高さを活かしながら教育環境を充実するリノベーションが可能である。エレベータ・スロープ設置などのバリアフリー化もできる。明石小学校の敷地は比較的余裕があるので、不足する諸室は、元プールの場所に別棟を増築できるし、校庭地下に体育館をつくることも可能である。地下体育館は港区立高輪台小学校のリノベーションでも採用されている。中央区は泰明小や常盤小はリノベーションを検討している。技術的には、明石小でリノベーションができないはずがない。

21世紀になったころからリノベーション事例は増えており、評価も高い。行政も議員も住民もそのような時代の変化を理解していなかった。

Q12 リノベーション案で教育環境充実ができるのか？教室数が足りないのでは？

A 明石小は、学年1教室で計6教室、特別支援2教室、幼稚園4教室であったが、学区の児童が増えて教室増が必要とされている。給食室、歴史資料室、防災倉庫、会議室、保健室などを別棟にして、校庭地下に体育館をつくることができる。そうすれば、いままでの校舎を改修して1学年2教室を確保し、図書、パソコン、多目的などの教育環境を充実できる。幼稚園を別棟にするなど、増築の仕方はいろいろある。

Q13 リノベーション案で防災機能充実ができるのか？

A 電気ガスともに止まっても、今までの校舎ならば自然の採光、通風が確保できる。建て替える建物は大きな箱型になるため、機械に頼る室内環境である。今までの校舎は3階までで階段の数も多いため避難しやすい。コの字型に校舎に囲まれた校庭は防犯や防災にも有効であり、非常時には今までの校舎の方が、むしろ安全である。建て替えより改修の方がCO2排出量も少ない。廃棄物も少ない。

Q14 工事期間が長くなるのでは？

A 改修であれば工事期間は大幅に短くなり、調査・設計期間を合わせても1年程度であろう。仮設校舎の使用期間は建て替えの場合の2年とくらべて半分程度になる。解体工事の騒音や振動もないので、工事中の教育環境はむしろ良くなる。改修後に、仮設校舎を解体し、増築工事しても、校舎建て替えと校庭工事に要する2年+αの期間内に終了することが可能である。

Q15 リノベーションは新築より高いのでは？

A 既存校舎の改修費用は、建て替えより安くなる。別棟として増築を行うリノベーション案をつくり試算したところ、建て替えの7割程度の費用で可能である。

Q16 リノベーションした建物は、維持管理に金がかかる？ リノベーションしても30年しかもたないのか？

A 維持管理費用は、新築もリノベーションした建物も大差ない。30年という数字に根拠はない。十分な改修をした建物は新築同様で、維持管理しただけではさらに100年以上持たせることができる。

●文化的、歴史的な価値

Q17 現存している復興小学校の校舎を活かして、歴史ある質の高いまちの景観をつくれぬのか？

A 明石小は震災復興で建てられ、戦争や戦後の米軍接收などを経た歴史の証であった。まちは、そのような歴史的・文化的な価値を失うことになった。

今では建築の不燃化・耐震化が進み、燃えない壊れない都市へと変わりつつある。日本の都市としては、かつてない状況である。建築の寿命が長くなり、質の高い建築を改修しながら長く使い続けることが可能になっている。建て替えが当たり前の時代は終わり、環境への配慮が大切な時代となっている。スクラップアンドビルドからリノベーションへとシフトしつつある。

復興事業として短期間に質の高い小学校を117校も鉄筋コンクリート造で建てたことは、世界の歴史の中でも例がないことである。復興小学校という事業の偉大さを理解し、しかもそれが戦争、高度成長、バブルを越えて80年の間、使われつづけた重みを受け止めるべきである。

復興小学校の知名度は高くなっている。観光に活かすこともできる。まちの核としてまちの記憶を継承してきた現存する復興小学校校舎のすべてについて、保存活用を再度検討し、質の高いまちの景観をつくるべきである。